

客員教員 永原 恵三

皆さま、ご入学おめでとうございます。客員教員の永原恵三です。私の専門は音楽学という学問です。説明し出すと厄介なので、ざっくりと音楽に関する学問です、ということにします。音楽というと、歌ったり、楽器を演奏したり、または鑑賞したり、と小中高の学校教育のなかで教えられてきます。そして、たとえば鑑賞では、この曲はどんな想いで作曲されたのかを考えてみよう、と言われて、皆さん困った経験があたりではないでしょうか。「もっと気持ちを込めて！」と音楽の先生から何度も言われたこともあるのではないのでしょうか。つまり、音楽というのが「感性」の産物、と思われているようです。

しかし、学問は「感性」ではありません。学問は「事実」を明らかにすることが、その大きな役割の一つです。音楽も同じです。私は、音楽は人間の営みである、と考えています。そして、音楽は人間の思考それ自体である、とも考えています。世界中には、現在も過去もさまざまな人びとに、さまざまな音楽があります。五線譜が読めなくてもよいのです。五線譜とは世界中にある音楽の記し方のほんの一つにすぎないからです。

ところで、放送大学はこの音楽学にとっても大きな貢献をしています。日本で音楽学の学部から博士課程までの教育がなされている三大拠点があります。大阪大学、お茶の水女子大学、東京藝術大学です。私は阪大を出てお茶大でこの3月まで教えていました。しかし、音楽学の教科書となる本は、実は放送大学の教材に何冊も出版されているのです。

徳丸吉彦先生（お茶大名誉教授）の『民族音楽学』、『民族音楽学理論』、そしてそれらを新たにまとめられた『ミュージックスとの付き合い方』（放送大学叢書31）、また山口修先生（阪大名誉教授）の『応用音楽学』、『応用音楽学と民族音楽学』、他にも日本音楽や芸術行政など数多くあります。西洋音楽史だけが音楽の勉強ではありません。音楽学の先端的な研究や考え方が、おそらく日本で一番多く読めるのが、放送大学の教材なのです。それらに一貫して通じているのが、音楽から人間を考える、という立場です。

私はよく、放送大学で教えている、と言うと、「ああ、テレビに出るのですね」、と言われるますが、「いえいえ、出ていません、センターごとに面接授業や自主ゼミがありますし、直接学生の皆さんとお話をしたりするのですよ」、と言います。私も音楽学の講義や合唱の「実技の授業」をゼミとして開いています。今は新型コロナウイルス禍でセンターに自由に出入りできませんが、本当は様々な「学び」の姿を、自分で自分なりに作ってゆくことができるのが放送大学です。これまで「学び」ということに躓いてしまった方々も、そうでない方々も、新たな発見や磨き直しをしてみてください。

最後に、私は、「自分は声が汚いから」、と言う方々に、いつもこう言います。「声に悪いとか汚いがあるはずがない。声はいただいたものなのですから」。声だけでないことは、もう、皆さんおわかりですね。

ご入学、おめでとうございます。

